



埋蔵文化財愛知

no.56

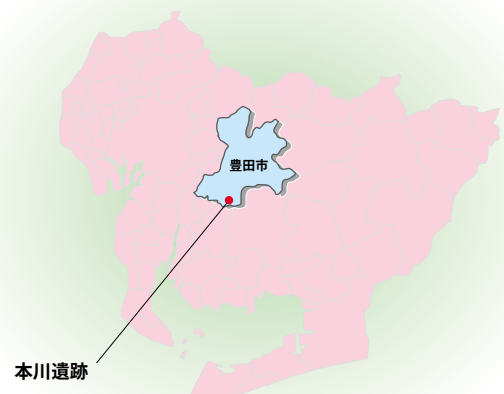


古墳時代中期の集落

ほんがわ 本川遺跡

豊田市南部に位置する本川遺跡で古墳時代中期の集落を検出しました。中にはカマドをもつ住居もみられ、西三河地方でのカマドの出現を考えるのに貴重な資料を得ています。

集落西側には溝・谷があり、そこから出土した多量の遺物の中には、ミニチュア土器・鳥形木製品などもみられました（Ⅱ頁に関連記事）。



遺跡調査速報



いまちょう
今町遺跡

豊田市今町字元屋敷
(財)愛知県埋蔵文化財センター

今町遺跡は矢作川右岸の碧海台地に立地する。発掘調査は第二東海自動車道建設に伴う事前調査として平成10年9月から平成11年2月まで4,400㎡を行った。調査の結果、縄文時代の竪穴住居1棟、奈良時代の竪穴住居4棟、鎌倉・室町時代の掘立柱建物などが確認されたが、遺跡の主体となる時期は戦国時代と江戸時代の2時期である。

戦国時代では幅3m前後の溝が8条確認されている。各溝の関連性が詳らかではないが、一辺約100mの屋敷地を想定することができ、C区SD09とC区SD15は虎口を形作っている。この他に掘立柱建物や井戸などがあり、これらは16世紀中葉～17世紀初頭に位置付けられる。周囲に元屋敷・北垣内・前田といった地名があることから、城館跡が存在した可能性も考えられ、近在する天文12(1543)年に創始された常行院との関連が注目される。

江戸時代ではT字に交差する道路が2条、区画溝、井戸、埋甕、石敷遺構、掘立柱建物などが確認された。道路に面した屋敷群と考えられる。(埋文セ 鈴木正貴)



縄文時代後期前葉の竪穴住居



戦国時代の堀(C区SD09・SD15)



ほんがわ
本川遺跡

豊田市幸町本川ほか
(財)愛知県埋蔵文化財センター

本川遺跡は豊田市南部、矢作川右岸の沖積低地に位置する。調査は第二東海自動車道建設に伴い、平成10年4月から実施し、調査面積は15,500㎡に及ぶ。検出した主な遺構の時期は弥生・古墳・戦国の各時代である。中でも古墳時代の遺構は残りがよく、竪穴住居約100棟を調査区西で確認している。住居からは5世紀前半から中葉の土師器が出土し須恵器はみられない。住居の中でカマドを有するものが2棟あり、うち1棟のカマドは遺存状態がよくカマド本体・煙道部が残存し、高杯を逆さにし支脚として使用している。出土遺物からこのカマドは西三河地方で最も古い例のひとつであろう。

これらの住居は東西を谷に挟まれた微高地上にあり、西側では谷と集落の境に溝が数条存在し溝中から土師器・ミニチュア土器・木製品が出土している。西側の谷・溝にはしがらみ・杭がみられ周辺に水田が展開する可能性がある。また、西側の谷から鳥形木製品が出土している。

(埋文セ 佐藤公保)



カマドのある住居



鳥形木製品

みずいり 水入遺跡

豊田市渡刈町下糟目・大屋敷
(財)愛知県埋蔵文化財センター

水入遺跡は、矢作川西岸の低位段丘上に展開する、古墳時代中期から中世までの集落遺跡である。近世半ば以降に堆積した、厚さ2～4mの砂と水田耕作土の層に埋もれていたため、これまで全く知られていなかった。このたび第二東海自動車道建設に伴う事前調査によって、その濃厚な遺構遺構の分布が明らかになった。

古墳時代中期の遺物は、低位段丘が川に向かって落ち込む地点で大量の出土をみている。土器は落ちぎわに集中しており、上方より廃棄されたことがうかがえる。高杯・小型壺が目立つほか、ミニチュア土器や勾玉の滑石製模造品が出土しており、祭祀後に廃棄されたものも含まれるとみられる。

奈良・平安時代の竪穴建物は60棟以上を確認しており、8世紀前半がひとつのピークになると考えられる。

中世の遺構では、古代の住居域に重複して多数の土坑墓(90基以上)を確認した。副葬品の多くは山茶碗だが、なかには完形の青磁椀が出土した墓もあり注目される。また56×70m規模の方形区画溝や中世末に構築された堤状遺構が確認された。

河川に面したムラに置ける、古代から中世の人々の活発な営みを知ることができる。(埋文セ 永井邦仁)



低位段丘の落ち際



古代の集落と中世の墓域

はちおうじ 八王子遺跡

瀬戸市八王子町
(財)愛知県埋蔵文化財センター

八王子遺跡は瀬戸市の東部、八王子町に所在する遺跡である。遺跡は矢田川の支流赤津川によって形成された狭小な沖積地となっており、標高200m前後の左岸側に立地する縄文時代と中世の複合遺跡である。

調査は第二東海自動車道建設に伴う事前調査として、平成10年12月～平成11年3月にかけて約1,400㎡の調査を実施した。

中世の遺構として、調査区中央から南辺にかけて14世紀～15世紀半ばの墓域に関連すると思われる土坑、ピットなどが検出された。中でも3m×1.5mの楕円形の土坑から口頸部を打ちかいた貼付牡丹文の灰釉瓶子や灰釉系陶器碗などが出土し、蔵骨器としての利用も想定される。

遺跡の主体である縄文時代については、土坑、ピットや早期粕畑式の竪穴住居を1棟検出した。早期後半・中期前半の土器片、石皿、石匙、磨石、チャート・石英を利用した石鏃、スクレイパー等も出土している。

(埋文セ 浅井厚視)

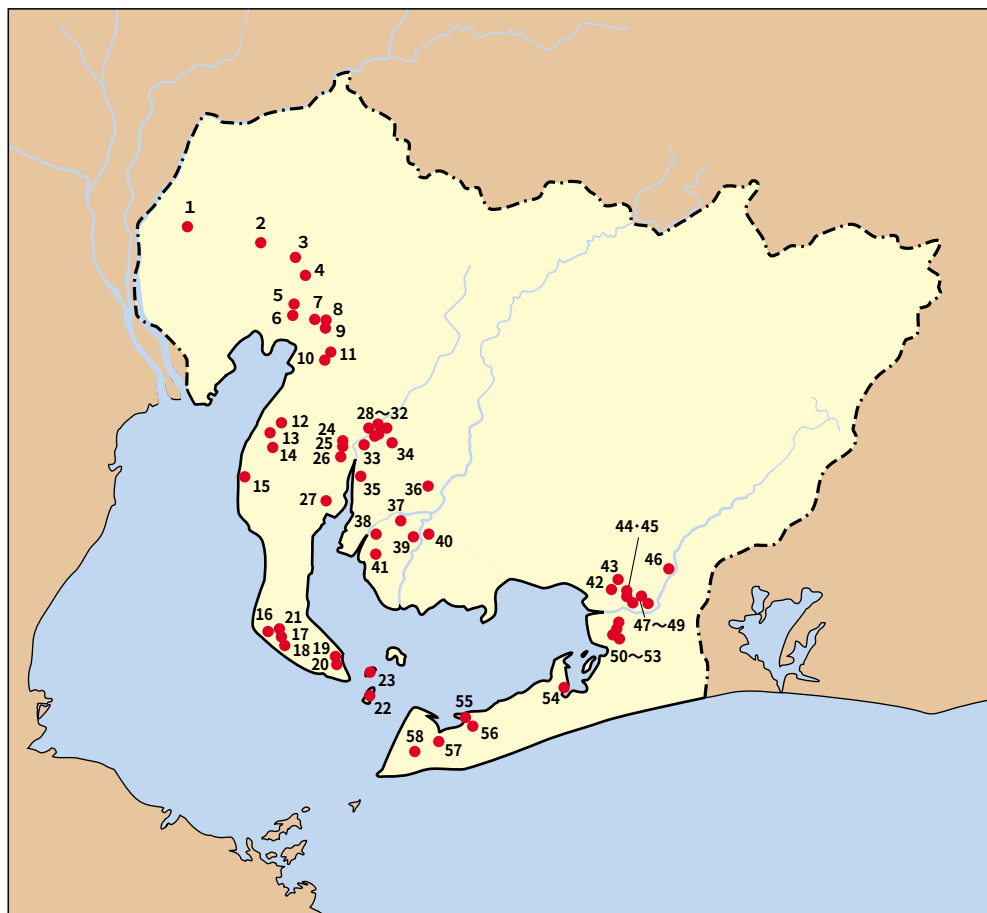


98年度 調査区全景

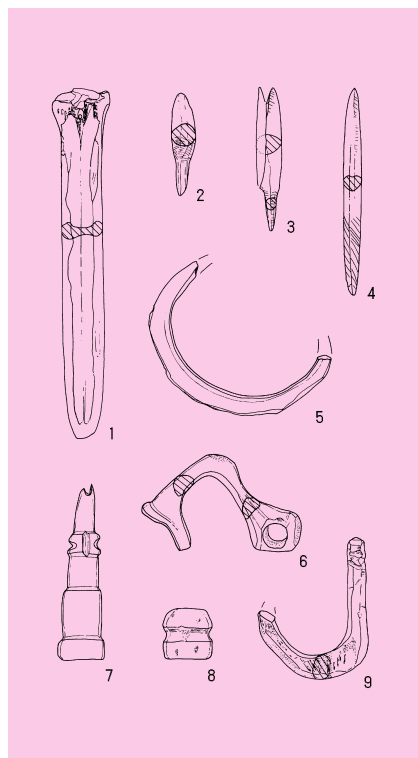


SK17 遺物出土状況

愛知県出土の骨角器

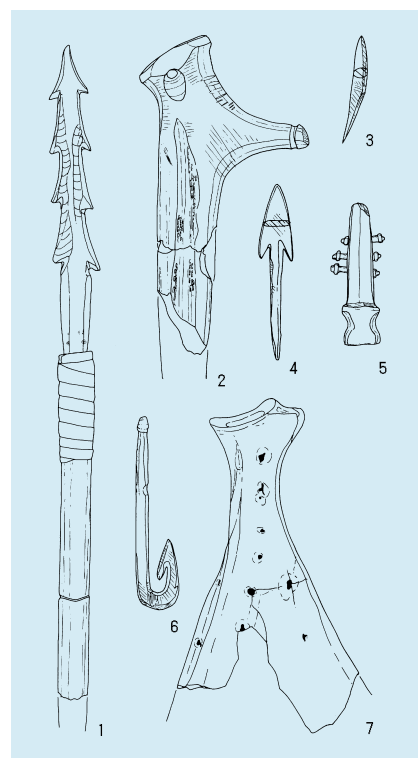


愛知県内骨角器出土遺跡位置図（番号は地名表と同一）



縄文時代の骨角器（1：3）

1～6 吉胡 7・8 稲荷山 9 枯木宮
2～6 名古屋大学文学部考古学研究室蔵
1・7・8 天理大学附属天理参考館蔵
9 西尾市教育委員会蔵



弥生時代の骨角器（1：3）

1～5・7 朝日 6 岡島
1・3・4・6 （財）愛知県埋蔵文化財センター蔵
2・5・7 愛知県教育委員会蔵

はじめに

愛知県内には、貝塚が多く見られ、それを特徴付けている貝層では、人骨・骨角器・動物遺体など、非貝塚遺跡では出土がまれな遺物の残存が良好な場合がある。

その中でも、ここでは県内出土の骨角器について概観していく。なお、ここでいう「骨角器」は、骨・鹿角・牙・貝を材とした製品すべてを総称するものとする。

骨角器の出現・変遷

先刈貝塚出土「のみ状骨器」が現在までのところの初出で、縄文早期の高山寺式に伴う。それ以降、縄文後期中葉まで主に刺突具・貝輪などのみで器種に多様性がそれほど見られない。出土遺跡が知多半島やその周辺に多く見られるのは、当時期の貝塚がこの地域にまともっている状況によるのであろう。

縄文後期後葉になると、多様な骨角器が出現する。吉胡貝塚・伊川津貝塚・保美貝塚など渥美貝塚群が盛行しはじめる時期とほぼ同時期であり、この地域が分布の中心の一端を担っている。縄文晩期になると雷貝塚、本刈谷貝塚、枯木宮貝塚などでも、遺跡の盛行に併せて骨角器も多く出現する。器種も、鏃・根挟み・弭形製品などの狩猟具、ヤス・鉋・釣針などの漁具、針・

刺突具・ヘラなどの生活用具、貝輪・筭・腰飾・垂飾などの各種装身具と、多種多様になる。また、東海地方ではハマグリなどの斧足類の貝殻をヘラ状に切り取った、舌状貝器と呼ばれるものが多く見られる。

縄文晩期後葉では根挟みが減少すること以外、基本的な器種の大きな変化は見られないようである。

弥生前期になると新たに加わる器種が登場する。生活用具では、縫針・紡錘車などである。また弭形製品などそれまでの既存器種にも変化が見られる。また装身具では貝輪や垂飾を除いて見られなくなるようである。

弥生中期も、さらに新たな器種が加わる。卜骨・刻骨といわれるものであり、両者とも韓半島や中国など大陸文化との関係が考えられ、注目される。

また、金属器の出現が骨角器に大きく影響を与える時期でもある。その影響は、大きく2つに分けることができる。一つ目は、骨角器の加工に金属工具が使用されはじめ、骨角器の形状に変化が見られるようになることである。二つ目は、鏃などで金属製品を模したものが出現することである。

弥生後期になると、漁具・鏃など今まで骨角製であったものが、それ自体が金属製へと変化を遂げはじめる。しかし一斉にその変化が見られる訳ではなく、材としての金属を入手できうる

状況においてのみのようである。

古墳時代以降でも骨角器が使われている。それは弥生後期同様、材としての金属の入手状況による場合もある。また、器種の中には骨角製でなければならぬものもあり、そうしたものは継続して使われていたようである。その代表的なものとして、卜骨・刀子の柄などをあげることができる。

材の種類

狩猟具・漁具・生活用具に関しては、骨・鹿角がほとんどを占める。かえしや挟りなど、使用時に複数の方向から力がかかる製品は、鹿角がほとんどを占め、ヤス・針やその他刺突具・ヘラ状製品など、使用時に一方向に力がかかる製品は、骨・鹿角で作られるが、骨製が多く見られる。骨は長い材を必要とする製品にはシカの中手骨や中足骨が使用されることが多く、シカ・イノシシの尺骨が使われる場合もある。また、錐には猪牙にて作られているものもある。

一方、装身具に関しては、材が多様である。器種ごとに見ていくと、垂飾では各動物歯（多くは犬歯）・脊椎骨・鳥類の管状骨が、腰飾りでは鹿角が、貝輪ではベンケイガイ・アカガイ・サルボウ・アカニシなどが主である。豊橋市大西貝塚では南海産のイモガイ製貝輪も見られる。

（埋文セ 川添和暁）

愛知県内骨角器出土遺跡地名表

番号	遺跡名	時 期	番号	遺跡名	時 期	番号	遺跡名	時 期
1	一色青海遺跡	弥生中	21	林ノ峰貝塚	縄文中～後	41	枯木宮貝塚	縄文晩
2	朝日遺跡	弥生前～後	22	神明社貝塚	縄文後～古墳	42	稲荷山貝塚	縄文晩～弥生初
3	西志賀貝塚	弥生前	23	新井浜貝塚	弥生前期～後期	43	欠山遺跡	弥生後
4	長久寺貝塚	縄文中	24	入海貝塚	縄文早後葉	44	檉王貝塚	縄文晩～弥生前
5	古沢町遺跡	縄文晩	25	宮西貝塚	縄文晩	45	菟足神社貝塚	縄文晩
6	高蔵貝塚	弥生後	26	石浜貝塚	縄文晩	46	山西遺跡	古墳後
7	瑞穂遺跡	弥生後	27	西の宮貝塚	縄文晩	47	五貫森貝塚	縄文晩
8	下内田貝塚	縄文後	28	上カス貝塚	縄文後	48	大蚊里貝塚	縄文晩
9	大曲輪貝塚	縄文晩	29	寺屋敷東貝塚	縄文後～晩	49	瓜郷遺跡	弥生中～後
10	雷貝塚	縄文晩	30	中手山貝塚	縄文晩	50	水神貝塚	縄文晩
11	上ノ山貝塚	縄文	31	ハツ崎貝塚	縄文早後葉	51	水神貝塚(第二貝塚)	縄文晩
12	法海寺遺跡	弥生中、古墳前・中	32	天子神社貝塚	縄文後～晩	52	大西貝塚	縄文晩～弥生初
13	西屋敷貝塚	縄文晩	33	本刈谷貝塚	縄文晩	53	さんまい貝塚	縄文晩
14	二股貝塚	縄文早後葉	34	中条貝塚	縄文後	54	吉胡貝塚	縄文後～晩
15	大草南貝塚	縄文晩	35	正林寺貝塚	縄文晩	55	青島貝塚	古墳中～奈良
16	下別所遺跡	弥生中	36	堀内貝塚	縄文晩	56	伊川津貝塚	縄文後～晩
17	先刈貝塚	縄文早前葉	37	八王子貝塚	縄文後	57	保美貝塚	縄文後～弥生
18	清水ノ上貝塚	縄文前～中	38	清水貝塚	縄文晩～弥生初	58	川地貝塚	縄文後
19	天神山貝塚	縄文早後葉	39	八反田遺跡	弥生後			
20	咲畑貝塚	縄文中～後	40	岡島遺跡	弥生中			

県内遺物紹介



でんぼうじのだ 伝法寺野田遺跡出土の無茎銅鏃

一宮市丹陽町伝法寺

伝法寺野田遺跡において弥生時代中期中葉の水田跡が検出され(調査概要はNo.55参照)、水田跡の大畦畔付近から無茎銅鏃が1点出土した。銅鏃は残存長3.0cm、幅1.3cm、厚さ(最大)0.4cmで、側縁がほぼ直線的、明瞭な両鑄造の鏃身を有し、鏃身には鑄をはさんで左右同一方向に横方向の研磨が施される。先端が鋭角をなして窪む着柄部

には、かろうじて目釘も確認できる。

無茎銅鏃は弥生時代中期から古墳時代前期を通じて生産されるが、これまで出土している銅鏃のなかでその出土数は1割にも満たない。日本海沿岸地域に多く分布することからも、その生産のあり方は有茎銅鏃と比較して特異であったと考えられる。鏃身や着柄部に無茎銅鏃の初現的な要素をみることができるこの銅鏃は、弥生時代における銅鏃の生産、流通のあり方を知るうえで注目される資料である。

(埋文セ 早野浩二)



平成10年度開催の現地説明会

遺跡名	開催日	所在地	内 容	参加者
志賀公園遺跡	10年7月11日(土)	名古屋市	古墳時代帆立貝形前方後円墳などの遺構説明 初期須恵器・土師器・石製品などの出土遺物の展示	500名
郷上遺跡	10年8月7日(金)	豊田市	戦国時代屋敷地などの遺構説明 土器・陶磁器などの出土遺物の展示	400名
能見城跡	10年8月22日(土)	東加茂郡旭町	戦国時代山城などの遺構説明 土器・陶磁器などの出土遺物の展示	150名
本川遺跡	10年10月10日(土)	豊田市	古墳時代集落跡などの遺構説明 土器・陶磁器などの出土遺物の展示	350名
水入遺跡	11年3月21日(日)	豊田市	古墳時代中期の水辺の祭祀遺構・古代の集落などの遺構説明 土師器などの出土遺物の展示	450名

本川遺跡現地説明会風景

本川遺跡現地説明会風景



埋蔵文化財愛知 no.56

発行 平成11年 3月31日

編集 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017

愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田野方 802-24

TEL 0567-67-4161 ~ 4163 FAX 0567-67-3054

印刷 クイックス